

嬌恋日記

中杉隆世

一、重い腰を上げる

葛咲くや嬌恋村の字いくつ 波郷

という句の「嬌恋村」に憧れて群馬県の北軽井沢に移り住んだのは紅葉の美しい平成二十五年の秋の事であった。その頃から戦時中小諸に疎開していた高濱虚子が書いた『小諸雑記』のようなものを書いてみたいと思っていたが、気紛れで横着で筆不精な私は「そのうちに、そのうちに」と思っている内にあつという間に丸六年が経ち元号まで変わって令和の世になってしまった。

その令和二年の初句会が「淡水俳句会」の第九十九回に当るということで新しく句会報の編集担当となった高嶋衛氏から何か面白いものを書いて欲しいと望まれ、頭の隅にあつた『嬌恋日記』を書く気になった次第である。

そこでまずは『小諸雑記』からヒントを得ようと書棚のあちこちを探し回ってみたところが一体どこに仕舞ったものかさっぱり見つからない。

さては、昨年の台風19号で地下室が浸水した際、だらしない私を叱る天の声かと「断捨離」を思い立ち、濡れた本を処分した中に紛れ込んでしまったのでは無かつたかと一応疑心暗鬼になったが、「待てよ。あれほど大事にしていた名著をたやすく捨てる訳がないじゃないか」と思い直し、 \langle うせものをこだわり探す日短か \rangle という虚子先生の真似をして探しまくってみたものやっぱり出て来なかつた。仕方が無いから頭に残ったうる覚えの断片を思い起こしながら我流で書き始めることとした。いずれネタが切れて物笑いの種にされること必定とは危惧するが、やっとな重い腰を上げてその気になった以上は乗り掛けた舟と観念して「見たまま、感じたまま」の漫談雑話の類をご披露申し上げることと致そう。

二、東洋の魔女

令和二年の今年は第二回東京オリンピックの年である。中国の武漢で発生した新型コロナウイルスの影響が些か気になるが無事開催されることを祈っている。今から五十六年前の昭和三十九年十月二十三日夜、六人制の女子バレーボールでソ連を打ち破って金メダルを取り日本国中を熱狂させた「東洋の魔女」は私と同じ釜の飯を食った仕事仲間である。

生れたばかりの長女を抱いて日紡貝塚工場の庶務課に赴任したのは昭和三十七年の正月五日のこと。工場の事務所で初めて出会った大松氏はひよろつとして背の高い、もの言いもおっとりとした人物で世間で云う所謂「鬼の大松」とは凡そ掛け離れた印象であった。チームのキャプテンの河西選手や半田選手、宮本選手は同じ事務所の同僚であった。ボーナスの支払の手が足りなくて彼女達に応援して貰ったこともある。

彼女達は午後四時頃から食堂を改造したコートで練習を始め真夜中まで猛練習を続けた。彼女達が「東洋の魔女」と呼ばれて世界中から恐れられるようになったのはその年の十月、第四回世界選手権大会で宿敵ソ連に勝って世界一となつて以来のことである。

その実力が得られたのは「成せば成る」「俺について来い」という監督の強い信念と新しく編み出された「回転レシーブ」の技に彼女達が必死になって附いて行つたからである。それらは電通の若い女性監督が製作した「挑戦」「闘魂」という映画の中に如実に紹介されている。大松さんに「回転レシーブ」がどのように生み出されたかを聞いたことがある。それは毎日選手の指先の1センチ先へボールを投げ続けるということであった。

大松さんは彼女達が結婚して幸せな家庭を築くまで一生懸命、気に掛けて世話を焼かれた。そんな優しい一面を持った人でもあった。

三、ブラジル

東京オリンピックの翌年、昭和40年の11月に私は丸紅との合弁会社ニチボー・ブラジルへ出向する事となった。ブラジルは地球の裏側にある日本から最も遠い国である。船便に間に合わせる為、至急生活用品を買い整え、ブラジル事情やポルトガル語の俄か勉強をして仕事や生活に対する不安を抱えながら妻と幼い子供二人を連れて日本を旅立った。

北半球と南半球とでは四季が全く逆になる。着いたブラジルは真夏であった。しかも北が暖かく南が寒い。当初は朝日が西から出る錯覚に捉われたものだ。サンパウロの北西125キロのアメリカーナにある綿紡績12、400錘の本社工場で私は事務担当取締役となった。毒虫や羽蟻の来る工場の事務所で悪戦苦闘し乍ら祝日返上で現地の要人と交際した。

ラテン民族でカトリック教徒のブラジル人は元来陽気でお祭り好きで寛容だ。彼等の信条は「人生は愛し合い楽しむ為にある」である。だが、日本人に好意的な彼等もその度の過ぎた勤勉性だけは理解出来なかったようだ。工場の休日出勤を巡ってカトリック教会の若い牧師達と衝突したこともある。それは私にとって移民と混血文化の多様な価値観を知るきっかけになるものとはなつた

が・・・。

ブラジルの魅力はその豊かな自然にある。月も南十字星も手を伸ばせば届く程の近さにあった。また、原始と未来の共存する、緑のアマゾンとモダンアートのブラジリアはブラジルの抱える矛盾の象徴のようにも見えた。

ブラジルの5年間は長いようで短かった。3年に亘り私を支えてくれた妻は長女の入学の為に先に船で帰国し、2年間は単身赴任となった。帰国後、ブラジルに似た北軽井沢に縁が出来たのも不思議ではない。その共通の思い出があるが故に妻と私とは今も心豊かに往時の事を思い出し語り合う事が出来るのである。

四、矢田部の一年

播但線の香呂駅から約二キロ西の城山の裾に矢田部という集落がある。そこに父の生家があり、私は太平洋戦争末期の昭和十九年秋から終戦までそこで伯父の厄介になった。

親許を離れ、伯父、伯母、従兄と暮すのは心細かった。臆病な私は外厠や牛小屋が怖かった。しかし、田舎では小学四年生は大人扱いだ。勉強が終われば伯父からは牛の世話を、伯母からは風呂焚きを命じられた。

麦踏、代掻、田植、草取、稲刈など一通りの百姓仕事を伯父に仕込まれ、腰巾着のように付き纏って一生懸命に働いた。村人は「疎開の子に見習え」と子供達を叱ったようだ。

春、燕がやって来ては軒端に巣を作る。夏、蛙の大合唱が始まり、螢火が揺曳する。秋、盆や祭の賑わいと新米や柿や栗の味が楽しめた。冬、鍛冶屋の鑪の火で悴んだ手を焙り、正月には餅を口一杯頬張った。そんな矢田部の四季や景観が私の裡で原風景となり心のふるさととなっている。

いよいよ戦局が重大化し、本土決戦が叫ばれる頃には学業もそこそこに開墾や勤労奉仕に駆り出された。下校時、敵機に襲われ慌てて藁塚に隠れたこともある。

神戸大空襲の時には、見納めにと村の皆が気を遣って呉れたのだろう。寝ていた処を叩き起こされ庭先で赤く染まった夜空を眺めた。

疎開で一番思い出に残るのは独り茸取をし乍ら遠い生野の青い空をぼんやりと眺めやっていたときのことだ。それは「山のあなた」の詩の遠い幸せへの憧れでもあったろうか。

年老いた今、私は疎開の頃漠然と憧れた遠い空の彼方に住んでいる。だが、その暮らしは夢と異なり決して優しくは無い。逆に遠い過去となった矢田部の一年が今の私には懐かしくも美しいものとなってその一齣一齣が鮮明に眼裏に浮かび上って来るのである。

五、この一年

この一年、つまり平成の終わりから令和の初めに掛けては長い人生の中でも事の多い一年であった。昨年のも二月一杯、草津のこしゆりという湯治宿で妻と二人ゆつくりと湯治を楽しんだ。四月に入って、売りに出していたエルウイングのマンションに買手が付き、急遽契約し引渡を済ませて山荘に居を移した。

大空と浅間山を眺めるだけの日々に戻屈していた妻は県道沿いの森の中で生活感を取り戻して元気になった。夏場に向かう当座は夏仕様で建てられた山荘の日常は快適であったが、北海道並の北軽井沢の厳しい冬を越すには雪や寒さへの対策が欠かせなかった。

妻の考えで地下室を改造し部屋と書棚とクローゼットを取付け、建物の外側に物置を新設した。他に凍結防止装置や風呂の追い焚き工事も行い、零下四十度能耐得る寒冷地エアコン、デロンギ、遠赤外線電気ストーブ、石油ストーブ等を買って整えた。問題は県道から地下室出入口迄の雪対策であったが、偶々敬老会で試みた町への陳情が功を奏し、町が雪掻きをして呉れる事となり助かった。

怖ろしかったのは10月12日の台風19号の集中豪雨であった。夕刻の大雨は庭中を池にし地下室は55cmも浸水した。119番したが、県警も消防も途中の崖崩れで遠回りを余儀なくされ延着した。千曲川の決壊はテレビで知ったが、近くの照月湖が消失した事には気付かなかった。浸水の所為かブレーカーが落ち易くなって30から60へ容量アップを東電に頼んだが道路公団の工事が優先され、引込線の電柱のヒューズが飛ぶ事態となって正月末に漸く対応して貰えたのであった。

今年に入って新型コロナウィルスの感染騒ぎが収まらない。緊急事態宣言が発出され、遂に東京オリンピックの延期、春・夏高校野球の中止に立ち至った。早い収束が待たれる。

六、麒麟が来る

今年のNHKの大河ドラマは「麒麟が来る」である。本能寺の変以降「逆臣」「主殺し」と悪名の高い明智光秀ではあるが、それは大きな誤解であって実は戦国の世を「麒麟が来る」平和な仁政の世にしようとした人物こそ他ならぬ光秀であったとするものである。

応仁の乱から戦国時代に掛けて「主殺し」が平然と横行する下剋上の世であるにもかかわらず何故光秀一人がそのような非難されねばならないのかどうしても納得出来ない。光秀の仕えた織田信長は天才的革命児として今も人気が高い

が、その「天下布武」の道を開いたのは細川藤孝と明智光秀である。戦乱の世を平定するには叡山焼討を始め非情な虐殺も容認され勝ちだがそれは勝者の理屈であって仁政とは凡そ掛け離れたものである。

光秀は常に信長の先鋒として数々の武功を挙げたが、それは大方信義を尽くす調略で敵を心服させる戦法であった。にもかかわらず時に豹変する信長に依って敵との約束を反故にされ度々窮地に立たされた。その一方で光秀は生涯側室を持たず臣下を重んじ領民を愛した。領内に仁政を布いたため領民の信望は厚かった。そこへ領地没収、中国出兵を命じられ、さぞ自己矛盾に悩んだことと思う。

最近見付けた明智憲三郎著『光秀からの遺言』（本能寺の変436年後の発見）には信長と光秀の「家康暗殺」の共同謀議やその裏で行われた光秀の家康、利三・藤孝を交えた「信長暗殺」協議、藤孝の家老に依る秀吉への秘密漏洩とかが描かれていて本能寺の変や山崎の合戦の謎が解き明かされている。

「麒麟が来る」世を招来する為、信長を見限り家康と盟約を結んだ光秀。「時は今」と詠じ「敵は本能寺にあり」と叫んだ真意は謀反ではなくしてクーデターであった。そして遂に家康の代に至り麒麟は現れたのである。

七、妻を選ぶ

「妻をめぐらば才たけてみめうるわしく情けあり」と歌われるように理想の妻選びは男子一生の一大事である。私の場合は意中の人と結ばれる迄に紆余曲折を経ただけに喜びもまた一入であった。

妻を見初めたのは高校二年生の頃。美術部の一年後輩であった彼女とは初めは文学書の紹介をし合っていたが、やがて二人で美術展を見に行く間柄となった。しかし、大学を卒業前の夏、将来の伴侶になって欲しいと申し出て断られ失恋と絶望を味わった。

就職先も決まらない段階でそれがどれほど無謀で非常識なものであるかも判らない程、恋に盲目になっていたのだろう。はつきりノーと言った彼女の方がずっと大人だった。

「その人は君には合わないな」

と私の悩みに耳を傾けながら橋間石先生は言った。そして、私の性格の弱点を指摘し、人間を磨くようにと諭された上で「女は掃いて捨てるほどいるのだ。」と慰められましたが、私の悶々たる想いは容易に消えなかった。

独り苦しみ抜いた末に

未枯れてけふこの女醜さよ 隆世

という句を作り、断腸の想いで未練を断ち切って就職試験に集中した。大学が推

薦した東京海上には面接で落ちたが、志望の日紡には合格出来た。この句は後に高濱虚子の添削を受けて「ホトトギス」の巻頭になった。

就職を機に彼女との文通は復活し、豊橋工場勤務となった秋、遂に結婚の同意を得た。

婚約や芝にまろべば露まみれ 隆世

曾って大学の一般教養課程の英語で老夫婦が畑仕事をしながら互いを思い遣り優しい言葉を交わし合う場面に感動したものだ。が、八十五歳になった今、妻と共に北軽井沢の山荘で草引をしながらそのような幸福な体験を味わえる日々に感謝するばかりである。

孀恋にいま妻とある涼しさよ 隆世

八、愛の聖地

それにしても孀恋村とは何とロマンチックな美しい地名であることか。明治二十二年四月、近郷十一ヶ村を合併して生まれた孀恋村の村名の由来は遠く日本書紀に遡る。

日本書紀卷第七に曰（いわ）く「時に日本武尊、每（つね）に弟橘媛を顧（し）の（び）たまふ情（みこころ）有（ま）します。故、碓日嶺に登りて、東南を望（おせ）りて三たび歎きて曰（のたま）はく、「吾孀（あづま）はや」とのたまふ。孀、此をば菟摩（つま）と云ふ。故因りて山の東（ひむがし）の諸国を号（な）づ（け）て、吾孀国と曰（い）ふ。」

孀恋村は上毛カルタ「鶴舞う形の群馬県」の鶴の尾の県北西部の標高千mの高原地帯に位置し、浅間、四阿、白根という二千m級の山を距てて長野県に接する。その山間には日本書紀に記す碓日坂（現鳥居峠）がある。

今や当地にはドイツロマンチック街道と姉妹を結ぶ日本ロマンチック街道が走り、孀恋キャベツのブランドで著名な高原野菜の一大生産地が広がる。その沿道には天明三年の浅間山大噴火で埋まった日本のポンペイ鎌原村があり、また、ベルツ博士に世界一と讃えられた草津温泉に続く多様な温泉地域がある。

大字田代のキャベツ畑の真中には新名所「愛妻の丘」が現れ、毎年九月中頃に旅で訪れる愛妻家達がそのお立ち台に立って日本武尊に倣って愛を絶叫する。「キャベチュー」と親しまれたその行事も今年15回を数えるが、残念な事にコロナ禍で中止となってしまった。

七年前、

孀恋に死すと思えば爽やかに 隆世

という覚悟で北軽井沢にやって来た私。

昨年は、

炎天の浅間の土になるべかり 隆世

という句を作った。願わくば「愛の聖地」に相応しい一句を遺したいものではある。

九、このごろ

七年八か月に及ぶ安倍長期政権を引継いで菅新政権が発足した。コロナ、経済再生という難題を抱えての船出だが、地縁も血縁も無い、秋田の農家出身の総理の手堅さに期待するところ大である。

このところ、虚子を知る人が少なくなった所為か、インタビューの申し入れが相次いでいる。七月末には、「晨」の代表同人の中村雅樹氏と中山世一氏が北軽井沢に来られ、拙宅で鼎談を行った。その後、原稿の朱入れに時間を費やしたが、読み応えのある面白い記事になったと自画自賛している。来年の一月号から隔月で数回連載されるのが待ち遠しい。引き続き日本伝統俳句協会の方からもインタビューの申し入れがあり、担当の藤井啓子氏と盛んにメール交換を楽しんでいる。

ところで、コロナの方は一向に収まりそうに無い。東京都がやっとゴー・ツー・トラベルに加わったので草津も軽井沢も息を吹き返す事だろう。オートレース発祥の地の北軽井沢も賑やかになるに違いない。しかし、僻地の感情は複雑だ。軽井沢病院も見舞客から入院患者が感染し一時閉鎖となった。草軽バスも大幅な減便である。このような有様で、今は軽井沢へ下りて行くのもままならない。

北軽井沢は短い夏が終わり秋酣。我が家も昨年の台風19号の大雨の傷が漸く癒えたところである。課題の庭園の排水溝は遅れに遅れてやっと完成した。土留めに使った栗の木は皮を剥くと四、五十年は持つということである。ついでに造った門柱が立派過ぎる。

この冬、地面が上下して地下室の出入口の扉が開かなくなるといふ事を初めて体験した。娘婿の好意で三重の津の実家が空家となつて居るから住んで貰えないかという話に妻は大乗り気である。十一月の半ばから来年の五月までの約半年、津で越冬する準備で今や大忙しだ。

十、浅間山

浅間山は美しい。鍋を伏せたような円錐形のその山姿は優美で女性的である。特に冬の雪を被った稜線は撫肩のようで朝日を浴びて朱に染まったときは柔肌を想わせる。そんな素晴らしい景観を八十路の私はリゾートマンションの十一階の書斎の窓からこの六年間眺め続けることが出来た。

海拔2568mのこの山は日々煙を上げる活火山で現在噴火警戒レベルは2に下がってはいるものの依然入山は規制されたままである。その噴火の歴史は遠く五万年前に遡り、繰り返される大噴火で成層を重ねつつ裾野を拡げて来た。そして独立峰ながら前掛山や黒斑山を擁する複合火山でもある。

最近知ったことだが、浅間山付近の地層はユーラシアプレート、北米プレート、フィリピン海プレート、太平洋プレートが闘ぎ合う火山前線の結節点に当り、東北から関東にかけて南に伸びる日本列島をここで大きく西へ向きを変える要因になっている。

軽井沢と中軽井沢との登山道の合流する峰の茶屋には日本初の東京大学地震研究所浅間火山観測所があり、そのため火山研究が最も進んでいるとの事である。今、天明3年の大噴火に伴う土石流で埋村となった嬭恋村鎌原の郷土資料館に隣接して浅間北麓ジオパーク推進協議会が総合インフォメーションセンターを設けて活発な活動を開始している。

思えば、ブラジルから帰国して妻の知人との縁で始まった北軽井沢への地縁は山荘建築を含めて半世紀に及ぶ。その間、峰の茶屋から延々と続く火山灰の中の一本道を家族で浅間山の頂上の火口迄登ったことも。そして、私の浅間山への愛は深く手にはいつも句帳がある。四季折々変化し、昼夜を問わず燃え続ける浅間山はいつまでも私の目裏に生き生きと焼き付いていて離れることがない。

十一、北軽井沢

たまたま、テレビの「秘密のケンミンSHOW」を見ていたら明石家さんまが「北軽井沢は長野県や」と主張していた。北軽井沢が群馬県であることは知らなかったようだ

新軽井沢から草津温泉を結ぶ草津軽便鉄道が出来たのは大正四年のこと。昭和二年、地藏川という駅の近くに法政大学が大学村を開村し、次いで照月湖という人造湖を造り、駅舎を善光寺風に改築して駅名を北軽井沢とした。それが、北軽井沢の名の由来である。

その頃、浅間山北麓の牧場や白樺の丘を走るカプトムシという高原列車があった。高峰秀子主演の日本初のカラー映画「カルメン故郷に帰る」や古賀政男の「丘を越えて」という歌謡曲が生れ、高原俳句が流行した。

大学村は野上弥生子や岸田国土をはじめ谷川俊太郎や大江健三郎という作家の執筆活動の場となり、それ故、文学村とも呼ばれた。午前中は相互訪問の禁止、夏場は新築の禁止など独特のルールがあつて立ち入り難い処だ。

私の山荘の近くに瀟洒な北軽井沢小学校がある。この小学校の校歌は谷川俊太郎作詞、寺島尚彦作曲という贅沢なものだ。寺島はあの「さとうきび畑」の「

ざわわ、ざわわ」の曲で知られている。ここで、世界的に有名な小川征爾が学生の頃、夏季合宿で師の斎藤秀雄に代ってオーケストラの指揮を執ったことがあるらしい。三人共、北軽井沢ミュージックホールの理事長となった。文学村の他に音楽村のある北軽井沢は文化の薫りが高い。

明治の文豪、田山花袋が「浅間の麓なる六里の焼原」と記したこの辺りは戦前、綿羊・軍馬を飼育する牧場となり、戦中は著名人の疎開地に、戦後は満蒙引揚者の入植開拓の場となった。今は、酪農・高原野菜・果樹栽培で繁忙する開拓村と自由でアカデミックで質素な別荘地が共存する緑豊かな避暑地である。

主宰「中杉隆世」プロフィール

昭和十年神戸市生まれ、二八年神戸商大入学、二九年橋間石（神戸商大英文学教授）を顧問に神戸商大俳句研究会結成、三三年三月ホトトギス巻頭（虚子選三月・六月二回、大学生では初、翌四月は後藤夜半）、同年神戸商大経営学部卒、大日本紡績（後のニチボー）入社、平成二五年明石市より北軽井沢に転居